

# 1 *Henry VI* における登場人物 の描出について

由 本 新

英国史劇の研究が進むにつれて、史劇に流れている、或いは、それを支えている思想的背景の整理が行われ、劇中のパターンを、その思想なり、秩序感の具現とみなすことが行われた。しかしこの様な整理をもってしても、1 *Henry VI* を所謂「Talbot 劇」から脱皮させる解釈が生れたかどうかは疑わしい。Tillyard の一見明快な整理も説得力は弱いと言わねばならない。<sup>1</sup> イギリスで 123 *Henry VI* をテレビ・ドラマに脚色した時、Talbot 活躍の場面を省いたがそれは成功であったということである。<sup>2</sup> この事は Talbot が、私たちに、やはり始末の悪いものを持つことを物語っている。

ところで、私は Bullough<sup>3</sup> の鮮かな編集による Hall の「年代記」を読むうちに、劇作家の苦心の跡を見て、何か此の芝居を弁護する気持に駆られるのである。必ずしも弁護は成功しなかったし、新しい統一した解釈も生れて来なかった。しかし「1 *Henry VI* では登場人物の性格はふくらみ<sup>4</sup>が全然なく、ただ役割だけがあって、芝居はエピソードの連続に過ぎない」などと言う見方は当たらないことは確かめ得たつもりである。source を眺めながら、劇中の人物描出の方向を一つ一つ確かめて行けば、ふくらみのある characterization の余地はかなりあるように思える。勿論 1 *Henry VI* から *Richard III* に至る英国史劇第1・四部作の中に並べて比較すれば、この作品に於いては人物の彫りの浅さが決定的であることは否定できないだろう。作品中のエピソード群もただ散乱しているだけだ、と言われるか

も知れない。しかし *characterization* を念入りにすれば、かなりの芝居が生れるのではないか。<sup>5</sup>

以下は、登場人物ごとに芝居を解体して、各人物描出の方向を考えた報告である。方法として、各登場人物を一度歴史上の実在人物（この場合は *source* の語る）の像と重ね合わせ、それから劇中に於ける像を定着させようとした。なお *source* の語る人物は「タルボット」の如くカナ書きにした。

- 註 1. E. M. Tillyard, *Shakespeare's History Plays* (1944) その 1 *Henry VI* 論は pp. 161-173 にあるが、彼は自分のパターンで作品を整理しようと性急の余り、p. 168 の Joan の台詞の引用で勝手な歪曲を行っている。
- 註 2. Andrew S. Cairncross ed., *1 Henry VI* (1962) p. xli. 此の Arden 版の序文には、今世紀に入ってからの、此の作品を一人前の芝居として再評価しようという学界、劇界の努力の系譜が要領よく整理してある。
- 註 3. Geoffrey Bullough, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, vol. iii (1960) 此の編集の特徴の一つは従来の Boswel-Stone や両 Nicol のように作品の筋書き順に *source* を並べないで、年代記の順序そのまま読ませてくれることである。従って単なる *verbal parallel* を追う比較を越えた作劇術の秘密を教えてくれる。
- 註 4. M. M. Reese, *The Cease of Majesty* (1961) pp. 166-7. 彼はあくまで *prince* たちの *majesty* が *cease* した所に史劇のドラマを見ている。だからその様な図式的解釈からすれば 1 *Henry VI* は当然はみ出してしまう。
- 註 5. 最近では Sen Gupta, *Shakespeare's Historical Plays* (1964) が、歴史劇をもう一度「芝居」として見ようとする意欲にあふれた書物であろう。特に Burgundy 公の役割についての言及 (pp. 56-7) は参考になった。  
(なお試論中 (p. 一) はすべて Bullough, *op. cit.* からの頁を示す。又作品の引用は Wilson 編の Cambridge 版に拠ったが、幕場行の指示は [I, ii, 3] の如くした。)

## § Bedford

彼は劇中では役割を縮小された人間と見るべきである。Hall の記述に依れば、ヘンリー五世の死後、グロスター・ウィンチェスターと共に、英国を背負う三本柱の一つ程の重要な人物である。しかし劇中では、それほ

ど重要な位置を与えられていない。むしろ一人の武人に過ぎない。しかも武人としての彼の大きさも Talbot の陰に隠れて縮小されている。

Bedford は仏国総督であって、今なら海外派遣軍総司令官である。そして彼は任地仏国で死ぬのであるが、Hall は彼の墓に関する挿話を次の様に伝えている。

—ベドフォードは、死後、ルーアンの有名な寺院に埋葬され、そこに甚だ壮大な墓碑が建った。後に仏王ルイ十一世がノルマンジーを英国から奪還した時に此の寺院を訪ねた。其の時、随員中に分別の欠けた、若気に逸る貴族達がいる、「先王シャルル七世の宿敵であった男の墓を、この様に派手にしておくのは、仏王と仏国の恥である。墓を毀って、骨を野に曝しなさい。」と王に迫った。これに対して王は、「私の父も、諸君の父も、生前、一步もベドフォードを退却せしめることができなかつた。今更その勇將の墓を毀って、それが何の吾が国の名誉になるか。私は彼が安らかに眠られる事をむしろ祈る。そして彼の業績から言えば、此の墓は貧し過ぎる位だ。」と答えた。— (pp. 65—6) [大意]

所がこの感動的な挿話は劇中では Talbot に横取りされている。すなわち Talbot の死後次の様になる。

*Bastard.* Hew them to pieces, hack their bones asunder.  
Whose life was England's glory, Gallia's wonder.  
*Charles.* O, no, forbear! for that which we have fled  
During the life, let us not wrong it dead.

(1HVI, IV, vii, 47—50)

後述する様に、劇中専ら喜劇的な役割を与えられている仏国の連中も、この場に関する限りは、壮嚴な表情で Talbot 父子の死を悼む姿勢になっている。

これに対し劇中の Bedford の最後は、椅子に乘せられたままの戦病死

である。一応次の讃辞が呈せられるが、これはむしろ極り文句的であって、決して華々しい面影は浮んで来ない。

A braver soldier never couchéd lance,  
 A gentler heart did never sway in court ;  
 But kings and mightiest potentates must die,  
 For that's the end of human misery.

(*1HVI*, III, ii, 134-7)

又 Hall に依れば、ベドフォードは、グロスターとウィンチェスターが対立した時に、わざわざ任地仏国から帰国して、両者の和解を斡旋し、議会でその為の大演説までした (p. 49)。そしてこれが成功して両者が握手するのであるが、劇中では該当の場面に姿も見せない [III, i]。わずかに開幕場面で、両者の口論が激しくなった時、

Cease, cease these jars and rest your minds in peace :

(*1HVI*, I, i, 44)

と言って彼が鎮める場面があるが、彼の両者間の仲介者の役割はこれ以上発展しない。

その他 Hall に依れば、ベドフォードは最初ウィンチェスターと仲がよく (p. 49 と p. 52)、後に悪くなっていく (p. 62) という複雑な対人関係の中にいるが、作品では全て廃されている。

さて、この様な役割でしかない Bedford を如何に役作りするか。基本的には、Talbot, Salisbury と並んで、武将の一人とすればよい。其の点では、彼が戦病死する直前、皆が彼を安全な場所へ避難させようと言うのを、頑強に拒否する所などが見せ場になる [III, ii, 86-100]。ただ彼は Talbot と違って身分の高い貴族であり、特に [I, i] では貴族達の間において、その武骨な面が他と対照的に出る所で、面白い演出が可能だと思う。

それは又、彼が劇中に於いて、第二 Talbot 的な孤独な役割を果さねばならないことをも意味する。

### § Gloucester

123HVI を通じて見れば、此の男は最も興味ある登場人物である。彼は 2HVI で非業の死を遂げるが、彼の劇中での役割を一言で表せば、「過去の栄光を死守しようとした」貴族の姿と言えよう。Hall の伝えるヘンリー五世の遺言の中に、

一息子は未だ幼く、諸君が忠誠を尽すべき王としては値打が無いが、私に対しては、彼に尽して呉れ。 — (p. 44)

とあるが、劇中の Gloucester は、将にこの姿勢で一生を終わっていく。

Hall の与える印象では、彼は英国を支える例の三本柱のうちでも最も重要な人物で、摂政 (protector) の仕事に就く。劇中も此の設定は変わらない。そして Bedford に見られたような役割の縮小化もない。

人間としての Gloucester であるが、彼の政治家としての有能さ、きびしさ、正義感などは彼の登場するどの場面にも読みとれるから引用の必要もなからう。

もう一つの問題は彼の「善良さ」である。Hall は、彼が一般庶民に愛された「善人グロスター」であった事を、特に彼の死後詳しく述べている (p. 108). そして事実 2HVI に於いては ‘the good Duke of Gloucester’ の表現は数多く出てくる。

さて此の 1HVI の彼に、どの程度人格面の善良さを読みとるべきか、彼を謂わば善玉として扱うべきかについて考えてみたい。それは作品の構図から言えば、もし彼が正義の善玉でなくて、Winchester と同列の、権力争いに明け暮れる一人の貴族にすぎなかったならば、此の作品は Talbot 劇として終るより道がないからである。

劇作家の作劇の方向からその鍵をさぐってみる。再び 2HVI に話を移

さねばならないが、Gloucester の女性関係の扱われ方を検討してみよう。彼が 2HVI で破滅していく直接の原因は妻 Elenor が witchcraft をもてあそんだ事件である。しかし Hall の描くグロスター失脚の経過のうちでは、此の妻エリノアの事件は余り大きな要因として浮び上らない。グロスターの権力を煙たく思うマーガレット派の貴族達の追い出し運動に重点が置かれている (pp. 106-7)。勿論 2HVI でも其の点は繰り返し出てくる。([I, iii] と [III, i] で特に) だが何と言っても妻の失態が直接の大きな原因に読めるように作劇されている。

さてこの問題の妻は 1HVI に出ない。ただ彼女に対する言及があるのでそれを検討してみる。その一つは、開幕場面で Gloucester と Winchester が口論をした時に、後者が彼を嘲って言う次の台詞である。

Thy wife is proud; she holdeth thee in awe,  
More than God or religious churchmen may.

(1HVI, I, i, 39-40)

これ以後この「恐い妻」は 1HVI では触れられないわけであるが、かなりよく効く台詞であることは確かだ。此の「恐妻家 Gloucester」のイメージは将に 2HVI の彼 (特に [I, ii]) の言動と一致するわけである。劇作家は 2HVI のプロットの為にだけ Elenor を恐い女にしたのだろうか。

Hall に戻って検討すると、これは劇作家が 'good' Gloucester を作る為にした一つの脚色ではないかと思われるのだ。Hall はグロスターの結婚問題をかなり詳細に語っていて、例えば、彼はこのエリノアと結婚する前に、他の女と一度結婚していた事を伝えている。しかもこの第一の女は人妻であって、オランダ公の相続人であった。それでもグロスターは、「慾に目が眩んだのか、恋に溺れたのか知れぬが」(p. 46) 強引に彼女を妻としたので、当時「一般庶民は目を見張り、貴族達は鼻をつまみ、教会方は目を覆った」(同上) 出来事だったことを報じている。その後ローマ法王

はグロスターの此の女妻との結婚を無効とした。そこで彼は第二の妻すなわちエリノアを選んだわけだが、彼女も前に王の愛人とされていた女であり、「ほしいままの慾情に目が眩んで娶ったが、これも又人々に後指をさされた不評判なものであった。」(p.47)

劇作家はグロスターの以上のような女性関係のスキャンダルを全て切り落して、その代りに恐妻 Elenor を仕立てあげ、「善人」Gloucester を描出しようとしている。恐妻のイメージは Hall には無いのだから、1HVI にそれが出ていることは、すでにこの作品に於いて善人として演じてよいことになる。

もう一つの脚色例を見て Gloucester の善人化を確かめたい。それは Henry VI と Armagnac の娘の婚約と、其の婚約が破棄されて、Margaret との結婚に進んでいく経過である。Hall が伝える所によると、

—アルマニャック伯と仏王ドウファンは、或る遺領問題で不和になった。そこで前者は英王に対し、「自分の娘を娶って呉れ、そうすればかなりの領土を提供するし、又今後、英国の大陸に於ける利益の保護拡大の為に種々協力を惜しまない。その代り、仏王ドウファンに対して一緒に戦ってほしい。」と申し出た。英国側はこれを受けて国の利益にかなうものとして此の婚約が成立した。所が結婚に至るまでにトールで英仏平和会談が開かれた。此の時の英国側の全権がサフォーク伯であった。所が彼は越度をして、自分の思いつきで、英仏両王が親戚関係になることが、和平への一番の近道であると考え、仏王ドウファンの従妹であるマーガレットをヘンリーに嫁入りさせる話を勝手に始めたのであった。—(pp. 70—71) 〔大意〕

所で当時の情勢を見ると、この時英国側はベッドフォード、タルボットを失い、大陸に於ける勢力は日増しに悪化していたのである。従つて今日目で見れば、第一の結婚話を進めようとするのは謂わば鷹派であり、第二の方は鳩派になるかも知れない。当時の英国の反響を Hall に言わせると、

一サフォークは此の話を英国に持ち帰ってこれによって英仏両国の恒久的の平和をもたらせると主張し、王も是に賛成した。又多くの貴族達、就中サフォーク派の人々は競って此の縁談を支持した。グロスター公のみが、アルマニャック伯との公約は破棄できないものであり、第一の話の方が英国の名誉にも適う縁談だとして頑強に反対した。— (p.72) [大意]

という状況であった。ここで劇作家の処理方法を見ると、先ず直前の場面〔IV, iii,〕で Talbot 将軍が戦死し、英国にとって戦争収拾が緊急の課題であることを感じさせる。それから第一の結婚話が始まる。内容は〔V, i, 1-27〕に尽されているが、要するに、「仏王 Dauphin の親戚である Armagnac の娘と Henry VI が結婚することによって、英仏両国間の血で血を洗う死闘に終止符をうとう。」と Gloucester が主張することになっている。劇作家は Hall の残した二つの縁談話のうちの、平和的な部分を選んで、これを Gloucester に与えていると言わねばならない。此の Gloucester の平和的姿勢を、善良であるとするか、弱虫であるとするかは、今日の私達の目は濁り過ぎていてわからない。しかしここにこの芝居を Talbot 劇に止まらせるか否かの別れ道があるとも言えよう。

以上二つの脚色例を Gloucester の善人化と解することが許されれば、彼は *1HVI* に於いてもその様な人間として描かれねばならない。そうしてこそ、不潔な Winchester に対して我慢のできない気持がよく点出されるのである。

## § Winchester

*123HVI* の筋の流れから言えば、Gloucester 対 Winchester の抗争は、Lancaster 対 York の抗争（バラ戦争）の前奏である。そして後者と同じように、英国の対外戦争の足を引っ張った内紛に違いな。

Hall の記述の調子をみると、グロスターを有能な、しかも庶民に愛さ



れた政治家として、一方ウィンチェスターを、私利私慾に動く坊主として描くことには筆を惜んでいない。しかし、この両者の衝突問題に関しては、どちらの肩をも持っていない様である。英国を混乱に陥れた内紛として、平等に両者を責める姿勢があるのではなかろうか。この辺りを作品と比較すると、劇中では Gloucester の善に対して、Winchester の悪が判然と出ている。

Hall に依れば、ヘンリー五世の没後、ウィンチェスターは、エクセターと共に、幼王の保護役に任ぜられるのであるが (p. 45)、劇中ではその仕事を与えられず、次の台詞で、その役割を明らかにしている。

Each hath his place and function to attend:  
I am left out; for me nothing remains.  
But long I will not be Jack out of office:  
The king from Eltham I intend to send  
And sit at chiefest stern of public weal.

(1HVI, I, i, 173-7)

この独白で彼は、自分が劇中典型的な悪役を務めることを自白している。

グロスターとウィンチェスターの抗争については、Hall に詳しく記されているが、例えば、

—ウィンチェスターがグロスターの権力を妬んだのか、後者が前者の富を妬んだのかは知らぬが、此の二者と、それぞれに組する人々が争いを続け、ロンドン市民は安眠もできぬ日が続いた。此の両者を仲介する為にカンタベリの大司教などは、日に八度も両者の間を往復して和解を計った。— (pp. 48-9)

とあって、これは丁度 [I, iii] の両者の衝突と、Mayor の仲介の場面に、その気分が伝えられている。しかし劇中では、Winchesterの方が無理を言っていると解すべきであって、喧嘩両成敗的に読むべきではない。

Mayor の指示で先に素直に折れるのも Gloucester であるし、仲介者 Mayor も

This cardinal's more haughty than the devil.

(1HVI, I, iii, 85)

と判断を下すのである。

同じことは〔III, i〕の王の御前に於ける、両者の和解の場面でも言える。王が涙ながらに和解を訴えるのに対して

*Winchester.* He shall submit, or I will never yield.

*Gloucester.* Compassion on the king commands me stoop;

(1HVI, III, i, 118-9)

と Gloucester が先に折れるのである。そしてこの後握手の手を先に差し延べるのも Gloucester である。Hall の記す和解場面では、その様な両者の態度の違いはない (p.51)。Hall はウィンチェスターの死後、彼について

一毛並は良かったが、学識はなく、気位が高く、厚顔で、誰よりも金持のくせに、けちで、血族を馬鹿にし、頼る者を威し、友情よりも利益をえらび、何でも手をつけるが、凡そ完成したことのない男であった。

そして彼の飽くことのない私慾と、自己保身は、後半生に於いて、彼をして、神をも王をも忘れさせた。— (p.109)

と述べているが、劇中では前後半生を問わず、ここに述べられたように描かれている筈であって、それは冒頭の独白が明示している。だから彼に相対する Gloucester を完全な善玉と描いてこそ、芝居は見やすくなる。又ベドフォードとウィンチェスターの友好関係が劇中に語られないのは当然であって、Bedford は悪人とつながっているのは具合が悪いのだ。

## § Exeter

彼の場合は狂言廻し的な、コーラス的な役割を与えられたと言えよう。Hall に依れば、彼はグロスターとウィンチェスターの和解（劇中では〔III, i〕の直後に死に、それまで彼の仕事であった幼王の保護役は、ウォリックが継ぐことになる（p. 54）。作品中では此の様なことは起らず、Exeter は相変らずコーラス的な役目を務める便宜的な登場人物である。Exeter のこの面を示す台詞としては、〔III, i, 187-199〕とか〔IV, i, 187-191〕又〔V, i, 30-33〕などが典型的なものである。

彼の役作りについても、コーラスの持つ客観的な、冷静な面を、そのまま適用して考えれば矛盾は起らない。特に〔I, i〕にその点が表われている。それは Bedford や Gloucester が、先王 Henry V の死を悼み、嘆き悲しむのに対して、Exeter が

Henry is dead and never shall revive :

(1HVI, I, i, 18)

と冷たい水をかけて、皆に次の課題に取り組ませようとする所にも見られる。又同じ場で Messenger が大陸での英軍の敗北を伝えた時、Bedford と Gloucester が、異口同音に、さぞ先王が墓の下で嘆くだらうとしか言わないのに、Exeter が先ず

How were they lost? what treachery was used?

(1HVI, I, i, 68)

と話を進行させようとする。その後第二、第三の Messenger の悲報を聞いた Exeter はさすがに、がっかりするが、最後に

Remember, lords, your oaths to Henry sworn :

Either quell the Dauphin utterly,  
Or bring him in obedience to your yoke.

(*1HVI*, I, i. 162-4)

と言って冷静に課題の解決に皆を進ませる。要するに彼は何時でも事態の達観者であり、老成した宮廷人なのだ。

### § Talbot

此の作品が所謂「Talbot 劇」と称せられ、彼の ‘scourge of France’ としての英雄譚の如くに言われたとしても、それは止むを得ないことで、それ程彼の見せ場は多い。

そうした彼の英雄としての役柄を強調した脚色の一つが Bedford の項でも述べた、墓の挿話の横取りであった。勿論 Hall でもタルボットの死後に

—彼は猛将中の猛将中であった。フランスでは、「タルボットが来た。」

と言うだけで、泣く子を鎮める事ができた位であった。—(p. 72) [大意] と記しているが、劇作家は此の強き將軍のイメージを卒直に拡大延長して、Talbot を創っている。劇中 Talbot の、又 Talbot について語られる台詞で、彼の勇ましさを語っているものは幾らでもあって、彼をこの役柄でまとめてしまえば、話は終りである。ここでは多少危険ではあるが、今日的な読み方の可能性を劇の中にさぐってみたい。

この *1HVI* で、英国は、Salisbury, Bedford, Talbot の三人の勇将を失う。そして Talbot の死は一番の損失である。所で、〔*2HVI*, I, i, 73-101〕の Gloucester の演説を見ると、そこに Talbot が出て来ない。

此の時 Gloucester は、「この様な不名誉な結婚を王にさせては、我々の折角の対仏戦での努力が水泡に帰するではないか。」と憤慨する。「Salisbury や Bedford の犠牲はどうなるか。」と訴える。所が Talbot の名は

奇妙にも抜かされている。これは Talbot が勇将だったとは言っても、遂に一介の兵士に過ぎないという役割を暗示していないだろうか。

そして 1HVI に戻って、改めて Talbot の言動を見直してみる。彼が大言壮語型であるとか、血に飢えた武士と見るのは、余りに今日的な見方かも知れない。しかし権力争いを続ける貴族達から完全に孤立した、寂しい武士のイメージは浮んで来る。

[1HVI, IV, i] で Burgundy の変節を聞いて、英国宮廷で反応を示したのは、王と Gloucester と Talbot だけである。「善人」Gloucester も孤独であるが、勇将 Talbot も孤独である。此の話の直前に（同じ [IV, i]）Talbot は国事の進行を中断してまで、自分の Falstaff に対する私憤をぶちまけるが、これに対しても、王と Gloucester 以外は全々反応しない。彼の短気さ、偉張りぐせが、並居る貴族達に嘲笑されているのかも知れない。

彼の戦死につながる作戦の寸前、Somerset が言う次の台詞は、勿論ライバル York に対する妬みが入っていて、そのまま受取ってはならないのだが、半分は真理として解し、其処に Talbot に対する皆の嘲笑を聞くこともできる。

This expedition was by York and Talbot  
 Too rashly plotted. All our general force  
 Might with a sally of the very town  
 Be buckled with: the over-daring Talbot  
 Hath sullied all his gloss of former honour  
 By this unheedful, desperate, wild adventure:

(1HVI, IV, iv, 2-7)

もし今日演出するのであれば、こうした、自分で気づかないだけに一層寂

しい武人の面影が描出できないものかと思う。

しかし芝居全体のバランスがあくまで大切ならば彼を正義の英雄一本に描くことだろう。それでなければ、彼を支持しながら死んでいく Salisbury, Bedford 等の武人貴族の役割までも寂しくなってしまう。

### § York と Somerset

123HVI を通じて見れば、彼等は勿論バラ戦争の主役である。しかし 1HVI では、まだ仲違いをしている二人の貴族でしかない。劇作家は 1HVI の筋の展開の中で、Gloucester 対 Winchester の対立、Talbot 対 Joan の英仏戦争を描きつつ、York 対 Somerset の対立を出過ぎない様に押えながら巧みに導入していると言える。例えば [IV, i] で王が戯れに赤いバラ (Somerset 側の印) を胸に付けたあと、気を悪くした York に対して、Warwick が「王は本気でやったのではないから気にするな」と言うのに対して、York は

An if iwis he did — but let it rest;

Other affairs must now be managéd.

(1HVI, IV, i, 180-181)

と言う。大変ドスの効いた台詞で、後の彼の役割の発展を約束する台詞であるが、同時に 1HVI に於ける彼の限られた役割をも示していると解せよう。そしてこれに続く場面が示すように、York と Somerset はその対立によって、大きく Talbot の足を引っ張る典型的な英国内の内紛の例として、1HVI での役割を果すのだ。二人とも人間的な影りはまだ浅い。

ただ 23HVI の展開、Hall の記述などを参考にして、多少の性格づけはできよう。ヨークの場合は、野心家ではあるが、なかなか政治力を持った人物らしいことが Hall に読みとれる。特にアイルランドの人心をつかむとか (p. 113)、貴族達を次々に説得して、自己勢力を着実に伸ばしてい

くとか (p. 119), 非常な実力者であるし, 又彼が死に臨む時は, 圧倒的多数の敵に自分の城を囲まれながら, 敢えて討って出て, 華々しく果てる (p. 177), という様な面も持っているのである。

23HVI の展開を見ると, 必ずしも York の, そうした実力, 武士魂は強調されていない。しかし 1HVI の役作りのヒントとしては, この様な Hall に現われた York の資質を参考にしてもいいだろう。

例えば, ヨークがヨーク公として復権するのは, Hall に於いては, 王が, ウィンチェスターとグロスターの和解に狂喜して, お祝いの的に行う決裁なのであるが, 1HVI では, Gloucester の次の台詞に明らかなように, 立派な政治家の推薦で実現するのである。

An if your grace mark every circumstance,  
You have great reason to do Richard right;  
Especially for those occasions  
At Eltham Place I told your majesty.

(1HVI, III, i, 153-6)

正しい政治家である Gloucester が, York の有能で立派な人物であることを認めていると言わねばならない。又 York は同じ場の Gloucester と Winchester の口論の最中に傍白して, 「もし今俺がものを言っている立場なら, Winchester をやっつけてやるのに。」 [1HVI, III, i, 64] というのである。すでに述べた様に, Winchester を悪人として正しく演じてあれば, 此処で York がむしろ善に組した, 希望の持てる人物であることをみるのは容易である。これは 2HVIで, York が決りかけていた仏国総督留任を, Gloucester の判断でフイにするまで続く。(この事件も全く劇作家の脚色であるが。) そうすると, York に相對する Somerset は, むしろ悪に組する立場に置いて, 又そういう信用のおけない人間として描出した方が, 芝居としては見やすい。

〔2HVI, III, i, 82-5〕で, Somerset が突然任地仏国から帰国し, 大陸に於ける領土が, すっかり英国の手から離れたことを報告する. 2HVI の中では, 此の事件に対する反応は驚く程小さいが, Hall の記述を借りると,

—サマセットは, 最終期の仏国総督をつとめて, 憶病にも私利私慾の為に, 領土を, 仏王に売り渡してしまった男一 (pp. 110—111) 〔大意〕として描かれている. そこには英国民にとって許せない悪役という結論が出ているのである.

こうした点をヒントにして, 1HVI の彼等の役作りを考えることを許されれば, 例えば, York を大柄な, 男性的な人物に仕立て, 一方 Somerset を, むしろ女性的な, 陰険な人物に考えることも可能だと思う. そうしておいて例えば〔II, iv〕の Temple Garden を演じた方が, 少なくともその場の芝居としては面白い.

ただし, この様に York と Somerset をはっきり善悪・正邪に分けて演ずると, この項の始めに触れた彼等の役割 (対仏戦争の足を引っ張る内紛の一例としての) が, 二人の間で平等を欠き, 又〔IV, iii〕, 〔IV, iv〕の解釈が変って来て, Somerset の卑劣さの方に重点をかける必要が起る. (その場の芝居としては, こうした方が面白く, 見やすいのだが) 又苦戦中の Talbot の台詞にある,

The Regent hath with Talbot broke his word  
And left us to the rage of France his sword.

(1HVI, IV, vi, 2-3)

(註) 此の場合 the Regent は York を指す. はそのまま受けとるべきだろうから, 矛盾が起る. (もっとも, 此の〔IV, vi〕は全部カットしても筋書きには影響はないのだが.)

## § Falstaff



Hall に於いても成程フォストルフは、タルボットが一時捕虜にまでなった激戦に於いて、「一撃も交えることなく戦場から立ち去った。」(p. 59) のであった。しかしフォストルフは、一方に於いて、ベドフォードの指揮のもとで、或る合戦に大変手柄を立て (p. 47)、タルボットと相並んで大陸の一地方の知事にまで任ぜられたこともある (p. 52)、一応の人物であったことが知れる。作品では、〔III, ii〕〔IV, i〕で完全に戯画化されているわけだ。勿論 Talbot と対比させる為である。

### § Salisbury

Hall に於けるソールズベリはベドフォードに進言して、オルレアン攻囲作戦を指導した大物である (p. 54)。作品では〔I, iv〕に出るだけで、子供の撃った弾で戦死するという、ベドフォードの戦病死と並んで残念な役割である。しかし撃たれたあと、彼を抱き起した Talbot が彼の過去の勇将ぶりを言葉多く語って、彼の姿を大きく見せようとしている。〔I, iv, 74 ff〕。事実 Salisbury の名は、此の前後数場面に渡って、それぞれ勇将として口にされている。又最終的に Talbot が、

Within their chiefest temple I'll erect

A tomb, wherein his corpse shall be interred:

(1HVI, II, ii, 12-3)

と言っているのは、先の Bedford の項で冒頭に触れた墓場前の挿話を一部 Salisbury に借りて来た脚色で、武人 Salisbury を大きく見せる。しかし全体的には Talbot の陰にかくれた、もう一人の武将以上には描ききれない。

### § Suffolk

2HVI に入ると、彼は Gloucester の宿敵となり、役割も大きくなる。

Hall も彼が非業の死を遂げた時、「サフォークの死によってグロスターの仇は討たれた。」(p. 112)と述べる位の悪役に成長する。しかし *1HVI* ではその端緒が示されるに過ぎない。しかし、Gloucester の項で述べたように、Margaret-Henry の結婚問題に関しては Suffolk が完全な悪役に脚色されている。それは彼の終幕の独白にも明らかである。

Margret shall now be queen, and rule the king;  
But I will rule both her, the king and realm.

(*1HVI*, V, v, 108-9)

(Winchester の項の最初に引用した独白と相似である。)

彼はこのような野心家には違いないが、Margaret を誘惑するという劇作家の創作にも見られるように、*1HVI* ではむしろ、好色な遊び人として描けば事足りるようだ。最初の出である、Temple Garden の彼の台詞、

Faith, I have been a truant in the law,  
And never yet could frame my will to it;  
And therefore frame the law unto my will.

(*1HVI*, II, iv, 7-9)

などは、彼の世話にくださった表情を適確に演ずべき所であろう。

## § Henry VI

*1HVI* に於ける彼の役割は決して小さくないし、史実の時間的経過を圧縮した結果、Hall に於けるよりも、年をとって登場する。しかしまだ Henry V の栄光の余光の様なものに包まれた立場であって、*2HVI* ではっきりして来るような、その宗教的な偏向、政治力の欠如から誤りを重ねていく人間はまだ熟していない。勿論 *1HVI* でも役作りとしては、そうした傾向を持たせて演じねばならないが、それよりも先ず何事にも未熟な

青年が描出されれば充分であろう。

脚色された点を見ると、York の復権 (York の項で触れた) を自分の判断だけで決裁できない若さを持ち、又、其の道のベテラン Suffolk の口車に簡単に乗せられて、Margaret との結婚に進んでいく青年とされている。劇作家の方向がそこに示されているのではなからうか。

### § Margaret

23HVI で大きな役割を演じる彼女は、Hall をして、「ヘンリイ王を哀れなる馬とすれば、マーガレットは強い雄牛であった。」(p. 106) と言わしめる。事実芝居の中でもその通りになっていくが、1HVI では、まだその面影は強くない。ただ勿論おぼこ娘では具合が悪いので、Suffolk の恋愛遊戯に堂々と立ち向う姿勢はほしい。

### § Warwick

彼も特に問題のない一人の武人肌の貴族に描けばよからう。法律問題よりも狩り遊びの方が性に向いていると言う台詞 [II, iv, 11-8] などがよく彼の人間を語っている。Hall に依ればウォリックは初め仏総督ベドフォードの副官として仕事をしていたが、ニクセターの死後、幼王の保護役として帰国する。(Bedford の項参照) 劇中では此の様な経過は省かれている。

又 Warwick は Somerset と共に [I, i] に登場するようなト書があるが、同場面では二人とも台詞がなく、演出の仕方によっては、この場面二人を登場させなくともよい。この場面で彼等の役作りをするのは非常にむづかしい。

### § Burgundy

Hall に依れば、バーガンディ公の去就は、英仏戦争に於いて重大な焦

点になっている。しかし芝居の中では、Burgundy は Joan の魔術の示威の材料になっているに過ぎない。

Hall の伝えるヘンリー五世の遺言の中に、対仏戦争に関して二つの大方針が示されている、第一は仏国皇太子ドウファンを徹底的に撃破することであり、第二は大陸に於ける友人バーアガンディ公と緊密な協力をしていく事だ、とされている (p. 44)、しかし劇中 [I, i, 162-4] の Exeter の台詞 (Exeter の項で引用) にあるように、劇作家は此のヘンリー五世の遺言の第一項には触れているが、第二項には触れていない。作品中当初は勿論 Talbot たちの英軍と協力して、Dauphin 軍と戦うのだが、この脚色が示すように役割の縮小化がなされていると言える。

その後、劇中で Joan が魔術によって、Burgundy を仏国方に就かせるが、これは Joan の witch 化に大きく働いている脚色である。バーガンディの変節に関して、Hall は複雑な原因が積み重なった結果であることを説明しようとしている。すなわち、(i) グロスターの第一の結婚 (Gloucester の項で説明済。相手の女がオランダ公の娘であったことに留意) がバーガンディの気に入らなかったこと。(ii) フランス総督ベドフォードとの不和 (p. 63)、(iii) そして何よりも大陸に居ながら英国側に組している不自然さに耐えかねて (p. 64)、遂にこうした政治的情勢の圧迫からドウファンに就いたことがわかるのである。劇中ではこれをあっさり と魔女 Joan の魔力によるものとしている。

又、彼の変節が英国に伝えられた時、「英国内は大騒動となり、市民はブルゴーニュ商人の店に押掛けて暴力を振った。」(p. 65) ことまでを Hall は報じているが、劇では当然扱い方を変えている。Burgundy 変節の報せが英国宮廷に伝えて来られる場合は、Talbot の項で考えたように、一方では Talbot, Gloucester の孤立を示す場であるし、又他方では此の作品全体に於ける Burgundy の重みを軽小にする働きを持っている。要するに作品全体の構図から言えば、英国の対仏戦の失敗は、国内の内紛と、Joan

の魔術が原因なのだ。そしてこれに合わせる為にグロスターのスキャンダルとバーガンディの政治的重みが同時に切り落されたわけだ。

次に Burgundy の役作りであるが、これは後述する仏国方の人物と同じように、思い切った喜劇的、笑劇的処理が適当であろう。彼が最初に現れる時は勿論英軍方であるが、其の時 Talbot 達と、Joan の噂をして、次の台詞を言う。

Pray God she prove not masculine ere long,  
If underneath the standard of the French  
She carry armour as she hath begun.

(1*HVI*, II, i, 22-4)

此の内容は編註者達が教えてくれる様に、大変 bawdy なものである。又後に奇襲によって Dauphin 軍を敗走せしめ、同じ様に Talbot 達と、敗走して行った仏軍の様子を語り合う時

... I scared the Dauphin and his trull,  
When arm in arm they both came swiftly running,  
Like a pair of loving turtle-doves  
That could not live asunder day or night.

(1*HVI*, II, ii, 28-31)

と好色な観察をしているのも彼である。又、〔1*HVI*, III, ii, 41-47〕にも彼と Joan の間に bawdy なやりとりがある。Talbot が例の Countess of Auvergne の招待を受けた時も彼が一番大きな反応を示し、

You may not, my lord, despise her gentle suit.

(1*HVI*, II, ii, 47)

と Talbot に言うが、これなどは、「据膳喰わぬは男の恥ですぜ。」と相

好を崩して一人喜んでいる姿でなければならない。彼の役割の縮小化に伴った、人格の卑小化であって、それを適確に演ずることによって芝居は面白くなる。

### § Bastard, Reigner と Alençon

仏国方の人物群は、上記 Burgundy と共に、喜劇的笑劇的役割を持たされている。特に此の三人は、「御連中」とでも言うべき趣きがある。

彼等が便宜的な役割を持たされているのは、彼等の登場の扱いから考えることができる。Hall に於いてもバスタードはオルレアン守備隊長である (p. 55)。しかしアレンサンはグロスターとウィンチェスターの和解 (劇では [III, i] の後英国から釈放され急拠ドゥファンの許に走るものであり (p. 52)、又レイニエも Hall の記述順序に従えば、ヘンリー—マーガレットの結婚話が出て初めて紹介される人物である (p. 71)。だが劇中では冒頭から第二の使者の台詞の中で、

The Bastard of Orleans with him is joined ;  
Reignier, Duke of Anjou, doth take his part ;  
The Duke of Alençon flieth to his side.

(1*HVI*, I, i, 93-5)

と一括紹介されているのである。又 Hall ではアレンサンは、タルボットが戦死する前にサマセットによって討たれる (p. 69) が芝居ではずっと最後まで「連中」と行動を共にしている。

又仏国方が Charles を中心に勢揃いする場が前後八場あって、そのうち Bastard が二回、([I, vi] と [V, iv]), Reigner が二回 ([III, iii] と [IV, vii]) 欠席しているが、この欠場は何の必要性もない。或いはダブルキャストの為の都合ではなかったかと考えられ、事情が許せば出場させてやりたい。

さて彼等の言動であるが、当然非常に bawdy であって、〔I, ii〕の Charles と Joan の出会いの場は最も激しい。Burgundy の項で触れた仏軍敗走の場面は、Hall の、仏軍が夜襲を受けて寝巻のまま逃げ出したと言う記事 (p. 54) を利用しているわけだが、充分喜劇的に演じるべきである。

彼等にとって戦争は最初から ‘peaceful comic sport’ 〔II, ii, 45〕だと言える。だから彼等から言えば真剣になって戦いをいどんで来る英軍は、‘hare-brained slaves’ 〔I, ii, 37〕であり、‘desperate’ 〔II, i, 45〕に写るのは当然である。従って合戦に勝てばそれを単純に喜ぶので、これも大げさに演じるべきである。〔I, vi〕がそれで、Charles だけは Joan にすっかり参って、彼女に感謝しているが、連中は早く酒を飲んで騒ぎたい気持が一杯である。

*Reigner.* Why ring not out the bells aloud throughout the town?  
Dauphin, command the citizens make bonfires  
And feast and banquet in the open streets,  
To celebrate the joy that God hath given us.

*Alençon.* All France will be replete with mirth and joy,  
When they shall hear how we have played the men.

(1HV1, I, vi, 11-6)

これ等の台詞には彼等の性急な祝い酒気分が出ているわけで Joan に対する感謝などは少しもないのである。

仏国方の人物を演出する場合、〔I, iv〕の大砲手とその息子、〔II, i〕の衛兵長とその部下達という端役にも適当な彫りをつけることが望ましい。〔I, iv〕の場合、父親は、「‘the governor’ の所へ行くからよく留守をしておれ」と息子に言い付ける。しかし Hall にはこの時「食事」に行ったとされてある (p. 55)。又劇中でも此の直後に、今 Orleans では食事時間

であることが示されている〔1HVI, I, iv, 59〕。従って此の場面では、父親は責任重い Orleans 砲兵隊長であるにも拘らず、飲食の為に息子に部署を預けて行く男なのであって、「the governor' の所」は嘘なのだ。だから父親の

Chief master gunner am I of this town,

(1HVI, I, iv, 6)

と威張るのもよく皮肉が効く。又息子もこの様な父親を諦めているので、父親を送り出す時、父親からは「何かあったら知らせろ」と言われているにも拘らず、

I'll never trouble you, if I may spy them.

(1HVI, I, iv, 22)

と言う。此処は大いに笑わして欲しい所で、笑ってこそ、次の Salisbury の戦死が効果的になるのではないか。彼等父子は Talbot 父子と対照的な役割を持つと言える。

〔II, i〕の衛兵長と其の部下達の会話は僅か数行であるが、部署に残された部下の台詞

[Sergeant goes.] Thus are poor servitors,

When others sleep upon their quiet beds,

Constrained to watch in darkness, rain, and cold.

(1HVI, II, i, 5-7)

は、直前の〔I, vi〕の仏軍の戦勝気分と対比させれば、実にうまい作劇術であって、この場の彼等の演出も自然方針が決まってくる。

Hall も戦勝に酔う仏軍の姿を繰り返えし描いているが、なかでも、芝居のこの〔I, vi〕から〔II, i〕にかけてのオルレアン攻撃軍撃退に成功し



た時の仏軍については、

一大変な馬鹿騒ぎをしたのであって、其の詳細はとてもここに述べきれない程であり、又其の必要も無いのである。われわれ英人でも、同様の場合には、同様の馬鹿騒ぎをするであろう。— (pp. 58-9) [大意]  
とまで言っている。如何に思いきった演出が必要かを教えているように思われる。

仏国方の例外としては [IV, ii] の Bordeaux 守備司令官が挙げられる。この場は Talbot 将軍が八方敵の大軍に囲まれ、遂に武運尽きることを予告する場面であって、この general の役割は、Talbot の運命を予告し、舞台効果の代りを務めるような、インパーソナルな、コーラス的なものである。彼の台詞中の

The period of thy tyranny approaches. (1HVI, IV, ii, 17)

This is the latest glory of thy praise (1HVI, IV, ii, 33)

などは、負け犬の遠吠えではなくて、自信に満ちた運命の宣告と聞かれるべきだ。

## § Dauphin (Charles)

さきの仏国方の連中と較べて違うのは、彼だけが真に Joan を信仰している点である。これをはっきり演じわけないと面白くない。すでに引用した [I, vi] の、連中だけが勝利に酔っている場面も其の一例であった。

又次の二つの例の様に Charles の台詞が連中の台詞と並んだ場合、一見同じように Joan を嘲った様に聞えるかも知れないが、実は [I, vi] と同じ様に Charles だけは真面目くさった表情が必要なのではないか。

- (1) *Reigner*. Woman, do what thou canst to save our honours;  
Drive them from Orleans and be immortalized.

*Charles.* Presently we'll try: come, let's away about it:  
No prophet will I trust, if she prove false.

(*1HVI*, I, ii, 147-50)

(2) *Charles.* We have been guided by thee hitherto,  
And of thy cunning had no diffidence:  
One sudden foil shall never breed distrust.

*Bastard.* Search out thy wit for secret policies,  
And we will make thee famous through the world.

*Alencon.* We'll set thy statue in some holy place,  
And have thee revered like a blessed saint.

Employ thee then, sweet virgin, for our good.

(*1HVI*, III, iii, 9-16)

しかし彼は決して予言を信じて戦う王者の風格を持っているわけではなく、[I, ii] の連中の評判通り、恐らくつまらない男であり、[V, iv] の講和の場面でも示される様に、口先きでは偉そうに言っても、一人で重大事の決定をなし得ない弱虫なのだ。勿論こうした点は劇作家の創造であって、Hall では一応神の祝福を受けた王としての敬意を払われた書かれ方をしている。

## § Joan

作品中では、彼女の行動を見ても、英国側からする彼女への言及から見ても、Joan を witch 乃至 strumpet としていることは一応明らかである。所がわれわれは近現代の様々なジャンヌ・ダルクの映像が邪魔をして、どうしてもそこに抵抗がある。特に次の様な台詞に出喰わすと、*1HVI* の Joan にもすでに「天才はひどく実際的な人間である」と言った面が描かれているのではないかと疑われるのである。

それは英軍に Rouen を奪回されたあと、落胆する Charles 達を励ます台詞である。

Dismay not, princes, at this accident,  
 Nor grieve that Rouen is so recovered:  
 Care is no cure, but rather corrosive,  
 For things that are not to be remedied.

(1HVI, III, iii, 1-4)

内容から言えば、是は [I, i] で Henry V の死に落胆する貴族たちを励ます Exeter の台詞 (Exeter の項で引用) と全く等しい。すなわち Joan の政治力、統率力、常識のバランスを示すものとして、彼女を高める働きをしていると考えられない事もない。

この様な疑問を一面に持ちつつ、劇作家の脚色の方向を確かめて、witch としての Joan を自らに納得させてみたい。

Joan の脚色については Hall だけでなく、むしろ Holinshed を参考にしたと言われているので、ここでは両年代記を参照する。ジョウンの生い立ちとか、ドウフェンの所へ連れて来られた経過については、両年代記の記述は大同小異である。ただ彼女の容姿に就いて、Hall は「その醜<sup>〇〇</sup>さの<sup>〇〇</sup>為に……」(p. 56) とあるのに対して、Holinshed は、「顔は先づ十人並<sup>〇〇</sup>で……」(p. 75) とある。これを劇では次の様に処理している。

In complete glory she revealed herself;  
 And, whereas I was black and swart before,  
 With those clear rays which she infused on me  
 That beauty am I blessed with which you may see.

(1HVI, I, ii, 83-6)

すなわち、「元は醜くかったが今は美しい。これはマリア様のおかげだ。」となっている。ところで Hall を読むものは、「魔女」はサタンの手先、「従ってジョウンはサタンの手先」と言う式をすぐ思い出すのであって、この台詞の中の‘she’すなわち「マリア様」は、実は「サタン」だと考えることができるのである。

Hall のジョウンの扱いは、割合明快であって、彼女は、はっきり一悪魔の手先、魔女である。仏人達が、彼女のおかげで英人を大陸から追い出すことに成功したと、信じているのは笑止であり、仏国の栄光の為にむしろこれを惜しむ— (p. 61) [大意]

とまで言っている。非常に主観的というか、感情的な見方ではあるが、態度は明らかで面白い。そこにはムキになってジョウンの功績を否定しようとする方向が窺えるのである。

Holinshed のジョウンの記述は、もと仏人の手になった材料を、そのまま記述しているとも言われるけれども、Hall に較べればずっと客観的な姿勢である。最初にジョウンとドウファンが会おう所を見ると、Hall の場合は、「それまで会った事もなかったドウファンを一目で認めたと言う話であるが、そんな馬鹿なことはないので……」(p. 57) という調子である。一方 Holinshed の描写は実に細かい (pp. 75-6)。そして劇作家は、成程この Holinshed の提供したディテイルを全部借用している。しかし作品の [I, ii] は此の材料に大変な肉付けがされている。「連中」の下卑た雰囲気、Dauphin と Joan のチャンバラ、Dauphin の求愛などはすべて劇作家が付け加えたものである。そこにはやはり Joan の witch 化という作劇意図が痛々しい程表われている。

ジョウンの処刑の場面に就いてみると、Hall は、<sup>た</sup>たった一行「ながい詮議の末、焼き殺された」(p. 61) で終るのに対して、Holinshed では、そのながい詮議の経過が詳しく語られ、最後には、

一悪<sup>〇</sup>霊<sup>〇</sup>に取り<sup>〇</sup>付<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>れた<sup>〇</sup>彼女<sup>〇</sup>が、「私は売<sup>〇</sup>女<sup>〇</sup>で、子<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>孕<sup>〇</sup>ん<sup>〇</sup>で<sup>〇</sup>い<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>す」と申

立てた。当局はこの真否を確かめる為九ヶ月処刑を延期したが、虚偽であることが知れ、遂に処刑されたのである— (p. 77) [大意] となっている。劇中〔V. vi〕でこの話が勿論利用されているが、そこでは虚偽の申立てではなくて、Joan は真の strumpet なのだ。(私達には大変ショックであるが。) 劇作家は Holinshed の材料は使ったが、あくまで Hall の姿勢でまとめているわけだ。

この項最初の引用に戻って、その演出を検討してみよう。果して天才的な Joan を読むべきであろうか。劇中に於ける彼女の役割を考えてみると答が出るようだ。すなわち、Joan を孤立させて考えれば、以上の脚色の方向が示すように、彼女を witch にし、strumpet にしておけば事は足りた。しかし此の 1HVI の筋書の中で、Joan は Talbot に相対して French scourge の役割を果さねばならなかった。だから、Joan が時として、天才的リアリスト振りを発揮せねばならなかったのである。こうした Joan の二面的な登場の意味を考えると、演出に於いて、彼女が天才的だとか、すぐれていると見える形になるのは不都合なのであって、それは廻りの仏国の連中が余りにも無能だから目立つという形にまとめるべきなのだ。又 Charles があっさりと Joan 信者になるのは笑うべきことであって、これは〔2HVI, II, i〕に於いて、Gloucester が Simpcox のインチキを見破る所に見られる邪教に惑わぬ姿勢などと、対照的に考えて、仏人を嘲笑しなければいけない。

しかし自分は Joan を witch と見ることに納得したであろうか。Joan は処刑される前、英人達を罵って次の様に言う。

But you, that are polluted with your lusts,  
Stained with the guiltless blood of innocents,  
Corrupt and tainted with a thousand vices,  
Because you want the grace that others have,

You judge it straight a thing impossible  
To compass wonders but by help of devils.

(*1HVI*, V, iv, 43-8)

劇中、英仏双方が互いを罵倒するのは、成行上当然であるが、此の Joan の台詞の中には、それ以上の洞察が含まれているのではないか。

もっとも、Hall に次の様な一節があって、特に「*'a thing impossible'* 云々」はここから出たと思われる。

—この女は、啓示、夢、荒唐無稽の幻想などで、仏国民の理性を盲目にし、彼等をして、想像すべからざるものを想像せしめ、不可能な事柄の実現を信ぜしめたが、……この様な女を讚美するのは仏人の恥だ。 —  
(p. 61)

だから、依然として、此の台詞の Joan も、Hall の姿勢で、彼女を witch とした上での演出が求められるかも知れない。

しかしここに、劇作家が演出家に残した可能性を見てもよいので、又それは劇作家の特権であると言わねばならない。

## § 結 語

図式的に割切れば Talbot-Bedford-Salisbury の武人だけが善であり、他の英国側の prince たちはすべて悪として、そこに witch Joan が手を貸して英国の衰退を早める形に見れば一番簡単であろう。以上の試論は此の図式に抵抗してみた報告ということになる。結果的に新しい図式が生れたわけではない。むしろ作品の図式的理解そのものに抵抗したことになる。作品自身も同じように抵抗していることを示しているのではなからうか。